

もう一度花咲かせよう 残間里江子

「定年後」を楽しく生きるために

1950年生まれの著者には、男友達がたくさん出てくるが、自分とは違う世界の人たち。人からよく見られたり、良い評価を得るためにという意識が強い感じがする。

jet setterの友人がいるから、層が違う。

著者は、「病気の問屋」とあだ名をつけられているという意外性があった。

「私は元気なうちに介護付きの老人ホームに入って、そこをベースに仕事をしたいと思っている」——聞いたこと無い。。

「だけど、俺はまだ当分は老いを遠ざける努力は続けるよ。そうだなあ、75歳まではアンチ・エイジングを重要課題にするよ。ヒアルロン酸もボツリヌス菌の注射もOKだね。75歳を過ぎても汚らしくはなりたくないからきれいな枯れ方を研究するよ」と、年の差婚の同い年男は言う。

一方、去年会った時は、髪を茶色に染めてビンテージのダメージデニムを自慢していた一つ年上の男友達は、友人のデザイナーにつくってもらったというモダンな作務衣を着て会いに来た。

「どんなに頑張っても年はとるから、ここらで表面的な若さの追求ははやめて、生き方がカッコよく見えるジジイになろうと思ってさ。これから農業をやろうかと考えているんだ。有機栽培の野菜を作りながら土地を若返らせて、地球に恩返しをするってどう？」

流行りの農業ではあるが、これもやりようによってはIt's cool! カッコいい古稀男になり得るかもしれない。

雑草と格闘したことはあるのか？ 口だけ、格好つけだけ、という感じがして浅薄。

「趣味を持たない私」

私の平均睡眠時間は20代から**3時間程度**だ。幼少期から10代半ばまで病床に就いることが多かったせいで、元気なうちは「起きたきりでいよう」と決めているのである。

しかし、還暦を過ぎてからは周りが「もっと寝なきゃダメ」とうるさいので**5時間に増やす**ことにした。しかし5時間近く寝て、目が覚めると「こんなことをしては行かない！寝ている時間をもったいない!!」と、後悔とともに飛び起きてしまうので、いまだ3~4時間睡眠という日も少なくない。

「ところがね、一緒に定年を迎えた同期の男性が妙なことを言ってくるのよ」

定年になった同期には関連会社の役員に転じた男性もいたが、どこからも声が掛からず静かに退職した人もいた。そんな中で退職の日が迫っているのに次が決まっていない

男性が、嫌がらせとしか思えないメールを送ってくるのだという。

「君が残って俺が放り出されるとは誰も思っていなかっただろうね」「君だって、あと1年いたってどうせ会社は何もやらせてはくれないのだから、1年経ったらきっぱり辞めた方がいいんじゃないか」など、返信しようのない内容に彼女は閉口していた。

そんな話を定年退職して1年後に起業した女性にしたら、ため息をついてこう打ち明けた。

「私が会社を立ち上げたと聞いて、『会社を創るカネがあるんだったら優雅に習い事でもすればいいのに』とか、中には“女のくせに、と言わんばかりに『仕事漬けの人生なんて君も不幸な女だな』とか『頂上ばかりをめざさないで下山の素晴らしさを味わう時が来ているんじゃないか』と、言ってきた男性が何人かいたわよ。こういうことを言ってくる男の人って、自分を有能だと思っていた人に多いのよね。ねじれた嫉妬と羨望のせいなのかしらと思っても、何だか悲しいわ」

「最近女性、『痴漢です!』と叫ぶだけではありませ
ん。男性の中には『ここに痴漢がいるぞ!』と、わざと騒ぎ立てて面白いがる連中もいる
といますから、あなたがどこの誰だか分かったら面倒なことになりかねませんよ」と、
言葉を添えた。

友人たちからは「あなた、わざわざ自分で病気を探しているんじゃないの?」と皮肉
られ、「病気の問屋」とあだ名をつけられている。

そもそもの病歴は誕生時から始まる。鉗子分娩の鉗子が視神経を傷めたせいで左目は
ほとんど見えなくなった。学枚に上がる前は百日ぜきから小児ぜんそくになり、赤痢に
もかかった。9歳で関節リウマチから心臓病になり、中学卒業まで年に100日程度、
学校を欠席していた。「満月顔」はその時大量投与されたステロイド剤のせいでムーン
フェイスになった名残りだ。

その後も胆嚢炎や十二指腸潰瘍、胃潰瘍に罹り、今でもびらん性慢性胃炎は持痛だ。
あまりみんながかからない「ジベルばら色糝糠疹(ひこうしん)という珍しい病気にもなった。これ
は、腹部や背中などに淡い紅色(バラ色)の皮疹ができる皮膚病で感染はしないのだが
原因は不明だ。身体に薔薇の花びらがまき散らされたようになると聞くとロマンチック
な気もするが、いざ罹ると単に痒いだけの不快な病気だ。手術経験は、半月板の他に虫
垂炎と声帯ポリープと腱鞘炎だ。

40代半ばになると無痛性甲状腺炎と手指の関節に激痛が走るブシャール結節とヘバー
デン結節になり、一時は左右10本の指関節に死ぬほど痛い注射を打っていた(知人男性
は1本打っただけで気絶した)。

母が脳梗塞で倒れてからは、隣室で寝ている母が気になって夜はほとんど眠れなくな
った。元々、平均睡眠時間は3時間程度なので眠れないこと自体は平気だったのだが、
やがて咳が止まらなくなり慢性気管支ぜんそくと診断され港区の認定患者となった。同
時に頸動脈狭窄と狭心症の要監視患者にもなり、今は冠動脈も「要監視」で3カ月に
一度検査をしている。

そこに右膝の半月板損傷が加わり、母の存命中は整骨院で治療を受け、母が死去した

あと手術に踏み切った。母が亡くなり、何年かぶりに3日続けて5時間近く寝たところ
背中が痛くて朝起き上がれなくなった。あまりの痛さに病院へ行ったところ背骨の
「棘(きょく)突起過敏症」と診断され、以来横向きで寝ている。

世の中にはもっと重篤な病を抱えている人もいるし、私など大した病気でもないで
病気話はそろそろ止めにしようと思っているのだが、何分にも病院に費やす時間が長く、
週に3日病院に行くことも珍しくないで、身近な話となると病気の話が多くなってし
ま、つ。

内臓疾患は全て経過観察だから、時々検査をするしかないのだが、手指の痛みや膝の
痛みなど整形外科系の疾患については「痛いのは生きている証拠」と、我が身に言い聞
かせ、色気のない「湿布女」の日々を送っている。

私の性分から言えば、**1カ所に定住しているのは3年が限度**で、3年を過ぎる頃から
急に飽きてくる。いや、飽きるというよりは自分を取り囲む環境を無性に変えたくなる
のである。

いくら環境を変えても、自分自身が変わらないことには新しいドラマは生まれないと
分かってはいるのだが、それでも「居場所」が変われば「変りたい自分」の背中を押
してくれるような気がするのである。

カメラ愛好家だった父が残した**写真は段ボールに7箱**もあり、その中には戦友たちの
写真が数多くあったので、お線香を上げて手を合わせて処分し、**作家志望だった母が残
した原稿は30箱以上**もあったので、息子に読ませたいものだけを残して、シュレッダー
にかけた。

2007年から11年まで毎週土曜日に「どよう楽市」という名で、その後は祝日の朝
に「残間里江子のわがままホリデー」という名で放送していたNHKのラジオ番組が、
このたび終了した。

足掛け11年もの長きにわたって芸能人でもない私がメインパーソナリティーを務める
例はNHKラジオ第一では初めてのことだと言われていた。

「光あるうち 光の中を歩め」というトルストイの言葉

~~~~~

ジェットセッター jet setter 自家用飛行機で世界中を飛び回る人物、という意味で用いられる表現。 自家用機を所有するほどの富豪であり、仕事にしても遊びにしても常に多忙を極めている、という意味を込めて用いられる。

~~~~~

特に同世代女性に多いのだが、「そんなことも忘れたの？ あなた大丈夫？」と、当方の「老朽化」をあざけり、自分の若さを誇示する人がいるのである。

長く介護生活をしていると、女は「女性性」(セクシーさ)を消失させてしまうと言われているが、私も急速に「無性化」が進んでいる。この分では、私も恋とは無縁の生涯になるのは必至だ。

30代から長きにわたって私の「精神安定剤」は中島みゆきさんの歌だった。

私は元気なうちに介護付きの老人ホームに入って、そこをベースに仕事をしたいと思っているので、彼ほどではないにせよ2、3年前から情報収集をしているし、時々見学にも出かけている。

70代の夫婦が登場

場し、それぞれの日常生活をドキュメントで紹介した。

夫はウォーキングをしたりストレッチをしたりと、毎日のように体を鍛えている。一方、妻は運動が苦手で手芸教室に通っている。ただ、習い事それ自体より仲間とおしゃべりをしている時間の方が長いみたいだ。

この夫婦にいくつかのテストをして、この先どちらの「寝込み率」が低いか、換言すればどちらが若いかを判定するのだが、結果は運動好きの夫より、ろくに運動をしない妻の方に軍配が上がったのである。

「ご主人は運動を1人でやりますよね。でも、奥さんはいつも誰かと一緒です。習い事もグループでやっていて、絶えず人と話をしています。運動より人とおしゃべりをしての方が脳は活性化しますから、結果として若いし元気なのです」。お医者さんにそう言われて釈然としない夫の顔が印象的だった。

私が毎日更新しているブログも深夜に執筆することが多いが、公開作業は高校時代からの友人で40年近く一緒に働いてくれている女性に頼んでいる。彼女には原稿に目を通して文章の校正をしてもらいたいという気持ちもあるが、それより夜の静寂(しじま)の中で、独りぼソソ書いた原稿を彼女が待っていてくれて、一、二度のやりとりを経て公開してくれる時に「同志的結合」を感じるのである。

とはいえ、彼女は十数年前にくも膜下出血で倒れた経験があり、以来、主治医から「その日のうちに寝なさい」と厳命されていることから、一応23時半を締め切りとして

いる。

2人とも年をとって互いに支え合うしかないという「実利」に気づいたのかもしれないし、ここで別れても新しいパートナーとの次なる展開は望み薄という諦めもあるのかもしれないが「古(ふる)夫婦」ならではの良さを感じるが多くなった。

性や愛を超越した枯淡の境地とでも言うのだろうか、互いの欠点をのみ込んだ上で**相手を思う気持ちがある**という関係は同性の**親友同士みたい**だ。現に夫婦間の話を聞いていても、若い頃のノロケ話と違って生々しさがなく聞きやすい。

先ごろ、がんの再発を官害された女友達を救っているのも親友的な夫の存在だ。

「検査結果には夫も驚いたようだったけれど、すぐに冷静になって『一緒に向き合っていこう』と言ってくれた時、今まで感じたことがなかったけれど、この人と結婚して本当に良かったと思ったわ」と、女友達は涙ぐみながら打ち明けたのである。この1カ月間、1人で病気と格闘してきた私はちょっぴり羨ましかった。

これは40年という長い時間を夫婦という形で歩んできたからこそ到達した境地で、「惚れた、腫れた」のさなかでは得にくい、年季の入った情愛なのだと思う。